

133

歴史散歩



くす はら じゆく 楠原宿

東海道の関宿(亀山市関町)の東の追分から分岐した伊勢別街道は、鈴鹿川に架かる勤進橋を渡った先の集落を抜け、小さな峠を越えるとすぐに芸濃地域に入ります。磨崖仏で知られる石山観音への道を右手に見送り、やがて街道は古い家並みが残る楠原の宿場に入っていきます。

楠原宿は、伊勢別街道の三つの宿場(楠原・椋本・窪田)の一つで、関宿と椋本宿の間に位置し、両宿を補完する役割を担っていました。街道沿いのまち並みは、連子格子や切子格子を備える歴史ある建物が軒を連ね、伊勢参宮の往来でにぎわった宿場の雰囲気を感じさせます。宿場の中ほどには街道が直角に折れ曲がる「榎形」が当時の

たたずまいを残しています。

江戸時代後期の「伊勢路見取絵図」には、近くに本陣や問屋場、高札場などが描かれ、かつて旅籠であった旧家には、現在も講札が保管されています。これらの講札は伊勢参りを目的とした「講」と呼ばれる集団の定宿を示した木札で、旅人の目印として軒先に掲げられました。また、「楠原宿」の焼印も残され、ともに宿場の歴史を物語っています。

楠原地区は、平成25年12月に策定した津市景観計画で、昔ながらの格子が連なる歴史的なまち並みや街道沿いの落ち着きあるたたずまい、周囲の自然と調和した景観が継承されるよう「景観形成地区」に位置付けられました。

現在、自動車の往来は北側を通る道路(県道津関線)が主に使われるようになって久しく、宿場には通過車両の少ない落ち着いた時間が流れています。

かつて参宮詣での人々がたどった楠原宿の緩やかな下り坂を進むと、伊勢別街道は宿場を抜けた先で中ノ川を渡り、椋本宿に向かう上り坂へと続いていきます。



楠原宿



旧家の玄関先に保管されている講札

